

# 英 語

堀 井 洋 一

## 1 英語における聞き合いの活動

本校英語の目標

※<sup>1</sup> コミュニケーションの基礎としての英語

コミュニケーション手段の一つとしての英語。自分の意思を伝えるための英語。

※<sup>2</sup> 教養としての英語

相手を尊敬し、温かな心をもった人間形成に役立つ英語。

※<sup>3</sup> 他の外国語を学ぶ基礎としての英語

将来、必要に応じて学習するであろう様々な外国語の基礎としての英語。

今回の学習指導要領改訂で「外国語活動」が新設され本格実施となった。本校では、外国語活動が導入される以前から『コミュニケーション活動を通して英語への関心を高め、聞くことや話すことなどのコミュニケーション能力の基礎を培う』という目標を掲げて英語の実践を重ねてきている。ここで述べる「コミュニケーション能力の基礎」は、「コミュニケーションの基礎としての英語」※<sup>1</sup>「教養としての英語」※<sup>2</sup>「他の外国語を学ぶ基礎としての英語」※<sup>3</sup>の三つの側面をもつ。子どもの姿としては、「コミュニケーションのための英語表現を獲得すること。」「他や異文化と関わり相互理解を深めるために、英語表現を活用すること。」「英語の表現活動で得た異文化などへの気付きをさらに深めようとする。」と表すことができる。

本校では、この目標に迫るために、1年生から6年間の英語に取り組んでいる。これは、6年間の学習により、発達段階に応じてゆとりをもって学ぶことで、豊かな英語表現を習得し、コミュニケーション能力を育むことができると考えるからである。

また、『コミュニケーション能力の基礎を培う』ためにはスキル重視でもコミュニケーション重視でもなく、その両方を6年間でバランスよく配置していくことが必要である。

子どもは、母国語ではない英語に触れたときに、日本語との音声の違いや言葉の意味に興味をもち「知りたい。分かってほしい。」と思うであろう。そして、英語と日本語との違いに気付いた子どもは、英語表現を「もっと聞いてみたい。話してみたい。」という思いをもつ。さらには、獲得した表現を使って「自分のことや思ったことを伝えてみたい。」という思いをもつと考えられる。このような思いを土台として、子どもは、互いの音声表現を聞き、その真似をしながら、他のよさを自分の表現に取り入れ、身につけた基本的な表現を工夫して伝えようとする姿が見られると考えられる。

英語は、そのものがコミュニケーションツールであることから、英語におけるコミュニケーションは聞き合いの土台になるものと考え、次のように「英語における聞き合いの活動」を定義づけた。

外国の言語について知り 獲得した言語を繰り返し使いながら 自分の思いや考えを伝え合い コミュニケーションの楽しさを味わう活動

## 2 聞き合いのステージと活動

英語がコミュニケーションツールであるという特性から考え、英語では英語表現をつかむ・慣れる・活用することを三つのステージとする。これらが機能することにより、本校英語の目標『コミュニケーション活動を通して英語への関心を高め、聞くことや話すことなどのコミュニケーション能力の基礎を培う』に近づくと考えられる。

### (1) D（でよう）ステージ ～英語表現をつかむ～

基本的な英語表現の獲得

子どもは、外国の文化等について聞くことを通して基本的な英語表現を獲得する。そして、外国の文化等を表す基本的な英語表現を知ることによって興味が深まり、それを理解しようとする意欲が生まれる。また、子どもが既に知っている英語表現を聞き合うことにより、新たな英語表現を共有する効果もある。

### (2) T（つながる）ステージ ～英語表現に慣れる～

基本的な表現活動

獲得した基本表現を使って表現活動を行う中で、子どもは基本表現を聞いたり、話したりする活動を繰り返す。それを通して、コミュニケーションツールとしての英語に慣れてくるのである。そして、友達の音声表現のよさに気付き、そのように表現を話してみたいという意欲をもつ。この過程において、子どもは、体験的に英語表現が定着し、基本的な英語表現が分かり使えるようになることを実感する。

### (3) U (うまれる) ステージ ～英語表現を活用する～

新たな疑問や興味  
新たな英語表現の  
獲得

基本的な英語表現を習得した子どもは、それを応用することにより、自分のことや思いを伝えられるようになることを知る。そして、伝えたいことを基本的な表現にあてはめて話そうと、英語表現を活用するようになる。ここでは、自分が伝えたいことをどのように表現すればよいかを友だちに質問するなど活用のためのかかわりも生まれる。このステージが機能することにより、外国の文化や相手への新たな疑問や興味、それを伝えるための新たな英語表現の獲得へと繋がる。

## 3 聞き合いの活動のための手だて

先に述べた三つのステージにおいて以下の五つの手だてを講じ、これらにより聞き合い活動に迫ることとする。

### (1) 外国の文化等に興味を持たせるための事象提示

意外性  
新しい出会い

子どもが事物や事象に興味を持つのは、子どもにとって驚きや意外性がある場合である。また、新しく出会うことに対しても興味は高まると考える。そこで、外国の文化や生活などの提示を工夫することで日本との違いに気付かせる。また、子どもにとって身近なことを取り上げることが興味付けには有効である。

### (2) 身近な基本表現の重視

身近な基本表現

繰り返し

比較

子どもは英語を使ってみたいという意欲を持っている。この意欲を大切にするため、子どもにとって身近で基本的な英語表現を扱う。また、子どもが自然に英語表現を身に付けることをねらい、繰り返し聞いたり話したりする活動を工夫する。その際には、ALTによるネイティブスピーカーの発音に触れる機会を設けるとともに、互いの発音を聞き合う場を設けることで自他の音声表現の比較を行い、そのよさに気付かせていく。

### (3) 「話す・聞く必要感」のあるコミュニケーション活動

コミュニケーション活動

互いのことや思いや  
伝え合う活動。伝え  
たいという思いを伴  
った活動  
必要感

英語表現を活用する場として、コミュニケーション活動を取り入れる。コミュニケーション活動を取り入れる視点としては、「体験的なもの」「自己表現にかかわるもの」「知的好奇心をゆさぶるもの」「国際理解に繋がるもの」がある。これらに共通して重要なことは「話す・聞く必要感」である。そのために、自分のことや思ったこと、相手について知りたいことなどを伝え合うコミュニケーション活動を行う。課題設定の工夫や活動内容の吟味を行い、準備の時間を子どもに保証することで、「必要感」のあるコミュニケーション活動とする。

### (4) 目的に応じたグループ構成

目的に応じた効果  
的なグループ

発話練習やコミュニケーション活動においては、さまざまなグループ構成が考えられる。全体、ペア、グループなどを有効に機能させることにより、子どもは自信を持って表現することができるようになり、自分の思いや考えを伝え合い相互理解することができる。「話す・聞き取る」「分かりやすく相手に伝える」「互いに理解し合う」など目的にあったグループ構成やその順序を工夫することによりねらいに迫ることができる。

### (5) 気付きや個のよさが明確になる評価やふりかえり

気付きやよさ

相互評価

評価の観点

コミュニケーションにおいては、自分なりの気付きや相手のよさを明確にすることが大切である。その手だてとして、評価やふりかえりの工夫がある。評価では、ワークシートによるふりかえりや子ども同士の相互評価などを取り入れる。「外国の言語や文化への気付き」「英語表現への慣れ」「コミュニケーションへの興味・関心」の三つを評価観点の柱とし、ふりかえりの視点を明確にする。また、HRTとALTによる評価を随時行い、子どものよさを全体に広める。子ども相互のかかわりあいや英語表現の豊かさについて評価することにより、次の学習への意欲に繋がるとともに、学びの確認となる。

## 4 実践例

三つのステージを機能させるために行った手だてを一学期の実践をもとに述べることにする。

### (1) 外国の文化等に興味をもたせるための事象提示

#### ① 外国の生活や文化の紹介

Dステージにおける働きである基本的な英語表現の獲得に繋がる手だてとして、「When is your birthday?」の1時では、ALTの誕生日についての話を聞く活動を取り入れ、日本とアメリカ合衆国との夏休みの生活の違いを比較させた。6月生まれであるALTから、ALTの母国であるアメリカ合衆国では、夏休みがとても長いことや夏休みには宿題がないことなど日本の小学校との違いについての話を聞いた。子どもは「アメリカはいいなあ。」「夏休みはいっぱい遊べるのか。」といった声をあげながら、外国と日本との学校の違いについて思いをもつことができた。また、ALTの住んでいた地域では、「Strawberry festival」という行事があることを聞いた。その後の自分の誕生日にはどのような行事などがあるかを考える活動では、子どもは、ひなまつり、入学式、こいのぼり（端午の節句）などの行事やスイカ、花火、プールなど季節の食べ物や遊びを思いついた。外国の話を日本と比較して聞くことにより、外国や日本のことをもっと知りたいという意欲を持つことができたと言える。この手だてはUステージでの、自分の誕生日の行事を調べて紹介する活動への意欲付けとなった。

#### ② 写真やイラストなどの活用

英語表現をつかむDステージの手だてとして、「自己紹介をしよう」で、ALTが家族について写真を見せながら紹介をした。子どもは、話を聞いた後にALTの家族について多くの質問をしていた。視覚的情報が加わることにより、話の内容に興味をもち「もっと知りたい。」という思いをもったと考えられる。また、「あなたは…できますか Can you …?」は、できるスポーツ（スキー、剣道）について、ピクチャーカード（資料1）を使いながらALTとHRTとがそれぞれができるスポーツについて会話をを行った。子どもは、カードを見ながらALTやHRTの話を「私もできる。」「ぼくは、…ができる。」と反応しながら聞いていた。写真やイラスト、実物などの資料を使って話をすることで、視覚的情報と子どもの既存の知識とが結びついた。英語表現獲得のための興味や関心が喚起される有効な手だてであったと言える。



資料1

ピクチャーカードを使った英語表現の獲得

### (2) 身近な基本表現の重視

#### ① 英語表現を徐々に増やしていく単元構成

Dステージにおいて行われる語彙、基本表現の獲得や積み上げ、Tステージにおける英語表現への慣れのために「私の好きなもの What is your favorite …?」では、扱う語彙を動物、食べ物、飲み物、スポーツと増やしていった。語彙を徐々に増やすことで、子どもはそれまで知らなかった語彙を獲得し、基本表現 What is your favorite …? にあてはめることで相手の好きなものを聞くことができることを体験的につかむことができた。英語表現を獲得して十分に慣れたことが、Uステージでの好きな色や季節、フルーツ、お菓子など多様な英語表現の活用につながったと考える。同様に、「あなたは…できますか Can you …?」でも、3時間の学習で、Can you の後に続く語彙を徐々に増やしていった。1回目は目的語がないもの（swim, run, jump, ski など）、2回目には目的語が必要となるスポーツ（do kendo, do judo, do karate, play baseball, play volleyball, など）、3回目は目的語が必要となる楽器演奏、食べ物（play the guitar, play the piano, eat natto,

eat sashimi など) を扱った。また、繰り返し発話をしていく中で do や play がいる場合といない場合に気付くことができた。その後のアクティビティでは相手のできることをインタビューする活動を取り入れた。子どもは、インタビューを楽しみながら do や play の使い分けに慣れることができた。基本表現に少しずつ語彙を増やしていくことで子どもは抵抗なく英語表現に慣れることができた。

## ② 同じ表現を繰り返し使う Warm up

Tステージにおいては子どもが自然に英語表現に慣れるために、Warm up では、ALT が体調を尋ねる質問 “How are you?” を、HRT が天気を尋ねる質問 “How is the weather?” を行った。子どもは、毎回、同じことを質問されることでその内容や答え方を理解し、自分の言いたいことを考えながら答えることができるようになった。そこで、5月の後半から「Catch ball game」(写真1)を取り入れ、子ども一人一人とキャッチボールをしながら質問とその答えを繰り返した。これまでの “How are you?” や “How is the weather?” に限らず、それまでに学習した “What is your favorite …?” や “Can you …?” を使った質問をすることで獲得した表現を繰り返し使う機会を設けた。これにより、自分で答えを考えて声に出したり、友達の音声表現を聞いたりする回数が増え、英語表現に慣れることができた。

また、教師対子どものやり取りだけでなく、子ども同士による「Catch ball game」を取り入れ、互いの体調を尋ねる活動を行った。子どもは、“How are you?” と、“I’m ….” を使って、互いに質問し合うことができた。相手の顔を見て、質問や返事ができるようになる効果もあった。対教師から子ども同士への活動へと移行することで、互いの音声表現のよさに気付くことができた。繰り返しの練習と獲得した表現を使う活動により、語彙の広がりや表現への慣れにつながった。Tステージにおける聞き合いである英語表現の慣れへの手だてとして有効であったと言える。



写真1

Catch ball をしながら Can you … ? に自分のできることを当てはめて答える活動

## ③ 楽しみながら英語表現に慣れるアクティビティ

「私の好きなもの What is your favorite …?」の2時では、Tステージでの働きである英語表現に慣れることをめざしたアクティビティを取り入れた。

聞くことに慣れるアクティビティとして「KEY WORD ゲーム」と「指差しゲーム」を行った。ゲームを楽しみながら表現に慣れるためには、ALT の発話を十分に注意して聞く必要がある。「KEY WORD ゲーム」では、相手より速く消しゴムをとるために集中して聞くことができていた。また、「あなたは…できますか Can you …?」では、「Simon says ゲーム」を取り入れた。このアクティビティも、ジェスチャーを楽しみながら、ALT の発話を真剣に聞く姿が見られた。どのアクティビティでも、ALT の発話を繰り返し聞くことで楽しみながら英語表現に慣れる効果があった。

一方、話すことに慣れるアクティビティとして、「When is your birthday?」や「私の好きなもの What is your favorite …?」では「Bingo ゲーム」を取り入れた。このゲームは、基本表現を使ってたくさんの友達にインタビューを行うことと Bingo をそろえるために友達や ALT の話す英語表現を聞き取ることの二つの要素により成り立っている。前半、子どもは制限時間内に Bingo シートの九つの枠に聞き取ったことを書き入れるために、進んで相手を見つけてインタビューをしていた。はじめはうまく質問できない子どもも、同じ表現を繰り返し発話することで徐々に質問できるようになっていた。

また、後半の活動では、指名された子どもが友達やALTの質問に対する自分の答えをみんなの前で大きな声で言うことができた。アクティビティを通して何度も同じ表現を使ったことで英語表現に慣れてきた結果であると考えられる。

### (3) 「話す・聞く必要感」のあるコミュニケーション活動



写真2 好みが同じ友達を探す活動

#### ① 友達のことを知るためのコミュニケーション

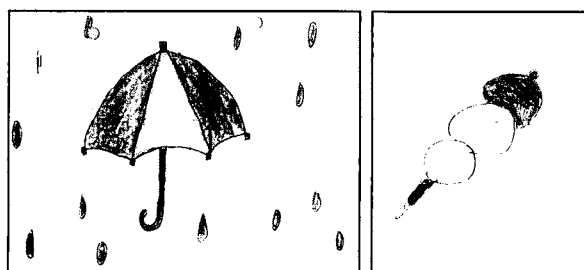
「私の好きなもの What is your favorite … ?」の4時では、〈好きなものが自分と同じか比べよう〉を学習課題として、自分と好みが同じ友達を探す活動を行った(写真2)。Uステージの聞き合いとして、それまでに学んだ英語表現を生かして自分の好きなものを伝え、相手の好きなものを聞くことをねらいとした。

子どもは、ワークシートに事前に自分の好きなものを記入しておき、自分の好きなものを相手に伝えた後、相手にインタビューを行った。相手の好きなものを記入する欄を設けたことで、子どもは自分と好みが同じ友達をたくさん見つけようと、積極的にインタビューを行い、メモをとっていた。この活動

では、飲み物、季節、フルーツ、お菓子など子どもの好みが多岐にわたったため、多くの英語表現が使われる学習となった。自分と好みが同じ友達がたくさん見つかって喜ぶ子どももいれば、あまり見つけることができず残念がる子どももいた。「同じだといいな。」「同じ仲間がたくさんいればいいな。」という願いをもったコミュニケーションであったため、相手の答えを聞いた後に、「同じ人がたくさんいたので、とてもうれしかった。」「同じ人がなくて少しさみしかった。」「同じ人がもっといっぱいいると思っていたけど、少なくて意外だった。」といった思いをもつことができていた。

形式的に英語表現を使うのではなく、自分と好みが同じ友達を「見つけたい。」「探したい。」という思いをもとに活動することで「話す・聞く必要感」のあるコミュニケーションになったと考えられる。学習課題が子どものものになっていたことが重要であった。

#### ② How do you say … in English ? を使った教え合い



資料2 誕生日紹介カード

Uステージにおける聞き合いとして、伝えたいことを「カレンダー When is your birthday?」の3時では、自分の誕生月の行事や生活について紹介するための準備を行った。子どもは、誕生月からイメージするものを考えたり行事を調べたりして紹介カードにイラストを描いた(資料2)。

中には、自分が伝えたいものや行事を英語でどう表せばよいか分からない子どもがいたため、英語表現が分からない場合には、以前学習した、How

do you say … in English ? を使ってHRTやALT、友達に聞けばよいことを伝えた。この声かけにより、準備の時に“How do you say … in English ?”と質問できる子どもが見られた。カード作りを活動として取り入れることにより、子ども同士が教え合う必要感が生まれる。学んだ表現を積極的に活かす場の設定が、友達とのかかわりを生むと考えられる。

しかし、中には、“How do you say … in English ?”と質問することができず、日本語で「…ってなんて言うの?」と質問している子どももいた。How do you say … in English ? を黒板に提示して、子どもがそれを見ながら使えるようになるなどの配慮が必要であると感じた。場合によっては、日本語を交えたやりとりを認めることも苦手意識を

もたせないためには大切である。また、子どもは友達よりも HRT や ALT に分からない表現を質問することが多かったようである。子ども同士での教え合いを取り入れる場合には、扱う英語表現を限定する手だても考えていく必要がある。

#### (4) 目的に応じたグループ構成

##### ① 英語表現を「話す・聞く」ことに慣れるためのグループ

誕生月について話すことに慣れるための基本表現の練習として、Tステージにおいてペア練習を取り入れた。「カレンダー When is your birthday?」の1時では、月の言い方を知るためにピクチャーカードを見ながら月の言い方を練習した。はじめは、ALT の発音を聞き、真似して発声する練習を行った。ここでは、一斉学習を取り入れた。一斉に練習することにより一人一人が何度も ALT の発音を聞くことができていた。次にペアで月の言い方を練習した。子どもは、相手を見て何回も話したり、反応しながら聞いたりしていた。また、言い方によく慣れていない子どもが相手に「…月は、なんて言うの。」と質問している姿や、相手がうまく言えないときに教えている姿が見られた。Tステージにペア練習を取り入れて繰り返し発話することで、「話す・聞く」ことに慣れる効果が生まれると子どもの姿から見る事ができた。

##### ② わかりやすく伝えるためのグループ

「カレンダー When is your birthday?」の4時では、前時に準備した自己紹介カードを使って誕生月について紹介する活動を、ペア→グループ→全体の順で行った。ペアでは、自分が考えた表現を言えるようになる。グループでは、話し方などについてメンバーからアドバイスももらって修正する。そして、全体では、これまでに使えるようになった表現を使って、たくさんの友達とコミュニケーションを図ることを目的とした。

グループ練習では、聞き取りにくい場合には「もう一回言って。」などの反応を示したり、互いにアドバイスしたりしていた。わかりやすく伝えるための活動として、Uステージでのグループ活動が有効に働いた。聞き合いのステージに応じてグループ編成を行うことで、相手にわかりやすく伝えることができる。活動を取り入れる場合には、活動の目的を子どもに明確に示すことにより、ねらいに沿った聞き合いが生まれると考えられる。

##### ③ 相互理解のためのグループ

Uステージにおける聞き合いとして「あなたは…できますか Can you …?」の3時では、自分のできることを紹介し、グループのメンバー4、5人に “I can … Can you …?” と質問する活動を行った。

子どもは、自分の特技やできることを理解してほしいという思いをもち、友達に伝えようと “I can ….” とはっきりと言うことができていた。また、グループのメンバーに問いかける表現 Can you … ? でも、声の出し方を強くしたり、友達を指して質問したりするなど相手意識をもって話していた。また、聞くほうの子どもも、「いっしょや。」「すごい。」 “Me, too.” といった自然な反応や使える英語表現での反応をしながら聞くことができていた。少人数での活動であったため、一方的に話すのではなく、相手の反応を受けながら話していた。また、聞き手も自然に反応でしていた(写真3)。大勢の前では声を出すことが苦手な子どもも、グループ活動では進んで答えることができていた。



写真3 相手を見て反応しながら聞いている様子

基本表現を使って、自分のことを伝えたい、相手のことを知りたいという思いの伴った活動となった。英語の表現に慣れていない子どもが相手を意識して話をする事ができる

ことや、聞き手の反応のしやすさを考えると、少人数での活動が有効であると言える。

### (5) 気づきや個のよさが明確になる評価やふりかえり

英語のふりかえり 2011年5月24日 名前( )

1. 月の言い方を英語で聞いて分かりましたか?  
はい いいえ

2. 誕生日を言えるようになりましたか?  
はい いいえ

3. 言えるようになった月を書きましょう(日本語でOK)

1月 2月 5月 11月 9月

資料3 言えるようになったことを記入するふりかえり (A児)

4. 好きなものが同じ人はいましたか?感想を書きましょう  
(同じだった人の名前も書きましょう)

感想 [ ]さんと[ ]さんがフルーツだったので、すごいと思いました。とてもおもしろかったです。

好きなものが同じだった人  
[ ]さん [ ]さん [ ]さん

資料4 友達のよさの気づきを記入したふりかえり (B児)

4/19「みんな早口だったのでわかりにくかったです。」  
6/7「さいしょは、自分のたん生日が言えなかったけれど、先生に教えてもらって言えたので、お母さんやほかの人にも言ってみよう。」

資料5 他とかかわりをもとうとするふりかえり (C児)

4/19「めいしこうかんが楽しかったです。」  
6/21「11月には、落ち葉ひろいがあることがわかりました。」

資料6 楽しさから新しい気づきへの変容

と」「分かったこと」といったように、観点を明確にすることにより、内容がアクティブの楽しさから英語でコミュニケーションができたことや相手のことが分かったという知的な喜びに深まったといえる。ふりかえりの観点を明確にすることで学びを再確認することや次の学習への意欲付けとなった。

### ① ワークシートの活用・評価観点の明確化

学習での学びを子どもが意識できるようにワークシートによるふりかえりをつみ重ねてきた。形式として、主に二つの視点を取り入れた。一つ目は、その日の学習のねらいに対して、「はい・いいえ」で選択するもの。二つ目はその日のメインとなる活動に関して、自分なりの気づきや学び、かかわった友達についてなどを中心に記述するものである。観点は「外国の言語や文化への気づき」「英語表現への慣れ」「コミュニケーションへの興味・関心」とし、子どもの活動に沿った具体的な言葉で問いかけた。

「カレンダー When is your birthday?」の1時では、月の名前を知ることからねらっていたため、言えるようになった月の名前を書く欄を設けた。1月から12月まですべて書いた子どももいれば、A児のように半分程度の子どももいた(資料3)。A児は、次時のふりかえりでは「いろんな人の誕生日が分かってよかった。」と書いている。前回あまり言えなかったのが、繰り返しにより英語表現に慣れるTステージにより、少しずつ分かってきたことがふりかえりから読み取れた。

また、「私の好きなもの What is your favorite...?」では、自分と好きなものが同じだった友達の名前と感想を書いた。B児の「…さんがすごいと思った。」という文から相手への興味「とてもおもしろかった。」(資料4)という文から、英語表現を活用できた喜びを読み取ることができる。(Uステージ)

気づきを記入する欄では、4月当初は「ゲームが楽しかった。」といったふりかえりを書く子どもが多かったが、徐々に他とのかかわりについて(資料5)や、友達や英語についての新しい気づき(資料6)を書くことができていた。C児は4月の活動で自分が聞き取れなかったことを書いているが、6月にはできなかつたことができるようになったという内容に変わってきている。さらには、友達以外の人にも獲得した英語表現を使ってみようという意欲を示している。「できるようになったこと」

## ② 気付きやよさを伝え合う場

ふりかえりの場として、自分の気付きや相手のよさを伝え合う時間を設けた。学習後は、その日の課題を確認してからふりかえりを行った。このことにより視点が明確になり、子どもは学習のねらいに沿ったふりかえりをするようになった。「私の好きなもの What is your favorite ?」の4時では、＜自分の好きなものを質問して、同じかどうかくらべよう＞という課題について、「ぼくは、みんなに好きなおかしを聞いてみたら、似ている人もいれば、すごく近い人もいました。みんなおかしが大好きだと思いました。」「好きなスポーツを聞いたけれど、同じ人がいなくて人それぞれだなと思った。」など自分と他を比べて思ったことを発言できる子どもが見られた(写真4)。また、「私は、好きなフルーツを聞いたけど、～さんが、私の知らないフルーツを言ってきたから、そんなフルーツがあるんだなと思った。」と友達が使った表現から新しい発見をしたことについての発言も見られた。Uステージ英語表現を活用してやりとりする活動の中で、自分の知らない語彙や新たな英語表現を獲得するDステージの働きが機能したのである。教師からの提示による英語表現とのこれまでのふりかえりでは、自分の気付きを発言する子どもが多かったが、今後は、友達から学んだことや友達の表現のよさについても意識できるように工夫していくことで、友達の英語表現を聞いて真似しようとする子どもが増えると考え。

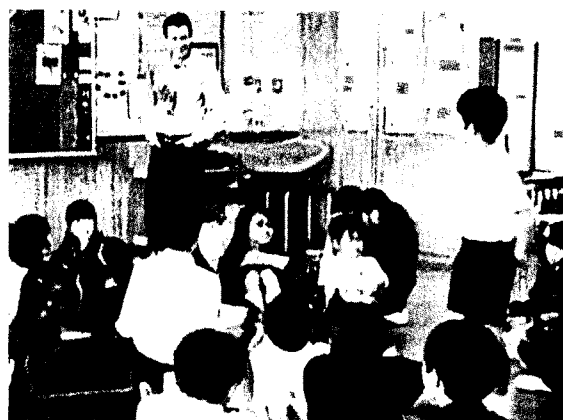


写真4

自分と他とを比べたふりかえりを発言をする子

## 5 成果と課題

聞き合いの素地を培う観点で、これまでの実践から見えてきた成果と課題は次の通りである。まず、成果として次の三つがある。一つ目は、英語表現を獲得するため外国の文化等に興味をもたせるには、日本との違いが明確なものを取り上げるとよいということである。それらの提示の際に、写真やイラストなど視覚的な資料を工夫することにより、子どもは事象に興味をもったり、日本語と英語表現との違いに気付いたりする。二つ目は、英語表現に慣れ、基本表現を繰り返すためには、グループ構成やアクティビティを工夫することが有効である。子どもは、活動を楽しみながら自然に聞いたり話したりして英語表現を身に付けることができる。三つ目は、自分のことや思いを伝えるコミュニケーション活動を行うことにより、子どもはこれまでの英語表現を工夫して使おうとすることに繋がるということである。

一方、今後の課題としては、三つが挙げられる。一つ目は、英語表現を獲得するための、外国の文化に関心をもつ素材の選択や提示の工夫である。子どもの興味を喚起するためにも「知的好奇心」「国際理解」などの視点をふまえて、今後も身近な素材を探っていかなければならないと考える。二つ目は、聞き合いに応じた活動の工夫である。アクティビティを楽しむだけでなく、英語表現を使って自己表現や他者理解ができたという喜びを子どもがもてるように、活動内容やグループ構成の吟味を行う必要がある。三つ目は、必要感のあるコミュニケーション活動をどう構築していくかである。子どもが自分の思いをもって活動する課題設定の工夫や外国の方との交流といったダイナミックな学習展開を取り入れることなどにより、英語表現を活用する経験ができるのではないかと考える。コミュニケーションの楽しさを味わうことに繋げるためにもこれらについて今後実践を重ねて行く必要がある。